

【脚注】脚注の番号は年毎に付けました。

- 1890 明治23 ※1 『土屋文明私稿』系譜には「某（男）（臨記？）文明の生れる以前に4歳で歿」とある。『群馬文学全集』2巻「羊歯の芽」p324にも「兄が四つの時であったという。」とある。数え年か。
戸籍の写しに「明治四拾壹年貳月拾五日父母ノ婚姻ニ因リ嫡出子タル身分ヲ取得ス同日届出同日受附」とある。
- 1897 明治30 ※1 『上郊小学校130年のあゆみ』（平成7年 群馬町立上郊小学校）に「明治22年5月上郊村が誕生「上郊尋常小学校」と改称。井出地区に分教場を置く。（化城寺）」とある。上郊小学校学籍簿に「入学年月日 明治三十年四月七日」とある。
- 1899 明治32 ※1 戸籍の写しに「塚越テル子と婚姻届出」と記載がある。但し、上郊小学校学籍簿には「塚越テル 卒業年月日 明治三十二年三月廿四日」とある。
- 1900 明治33 ※1 『現代短歌全集』（昭和5年 改造社）巻末記p397に「日本の少年の多くがさうであるやうに、自分も十一二歳の時に十七文字の発句と三十一文字の歌の事を教へられた。」p398に「自分はこの伯父から教へられて十一二歳の時何首かの歌を作らされた事があるが、恐らくそれは「初雪や二の字二の字の下駄の跡」といふ種類のものであつたらう。それから小学校の先生の影響や、又この伯父の所有してゐた国語読本に和歌の類が多かつたのでそれを真似たりして居たらしい。」とある。
- 1901 明治34 ※1 『上郊小学校130年のあゆみ』に「明治34年2月 現在地（保渡田）に校舎建築。」とある。
- 1901 明治34 ※2 上郊小学校学籍簿に「卒業年月日 明治三十四年三月十四日」とある。
- 1901 明治34 ※3 橋本徳寿『土屋文明私稿』p120に「座談会での発言文明の発言を要約すると」「私が高等一年に進む時に新校舎が出来高等科も出来た。高等二年から中学へ行けるのだが、父は中学へ出したいものだからね。私の同級生は二年から行った。私は残って高等を三年行った。」とある。「座談会」とは昭和40年1月から12月まで『短歌』に連載された「土屋文明座談」のこと。『歌あり人あり』（片山貞美編 昭和54年 角川書店）として単行本化されている。
上郊尋常高等小学校学籍簿に「入学年月日 明治三十四年四月廿二日」とある。
- 1902 明治35 ※1 『群馬文学全集』2巻「羊歯の芽」p337に「先生の授業で今に記憶にあるのは、一過一篇ずつの作文の宿題を課されたことである。それは多く記事文であったが、ある時「秋巳城山に遊ぶ」という題が出た。私はそこで、級友の五、六人をさそって、一里ばかりある隣村の古城跡に放課後から出かけた。この時の作文は先生から非常に誉められ、私も嬉しかったが、どんなことを書いたかは今は記憶にない。それは勿論、なり、たり文であった。」とある。
- 1903 明治36 ※1 上郊尋常高等小学校学籍簿に「塚越エツ 退学年月日 明治三十七年四月一日 退学ノ理由 病気の為メ」とある。『群馬文学全集』2巻「羊歯の芽」p330に「エツ子」とある。
- 1903 明治36 ※2 『現代短歌全集』（昭和5年 改造社）巻末記p398に「「小琴をば風のまにまにかなづるは神にやあらむ松の秀枝に」といふのは十四の時の作を今でも覚えて居るのである。」とある。14歳は数え年か。
- 1904 明治37 ※1 上郊尋常高等小学校学籍簿に「卒業年月日 明治三十七年三月廿四日」とある。
『現代短歌全集』（昭和5年 改造社）巻末記p398に「中学へ入学の前後から自分の最も興味のあつたのは数学で、其の頃は数学教師にならうとしたり、工業技師にならうとしたりするのが楽しい空想であつた。」とある。

- 1904 明治37 ※2 『土屋文明百首』p79高木佑八執筆頁に「先生の村から直線にしても六キロ以上ある。明治の世のその通学路は砂利道であり、先生は徒歩で通われたのであるから、苦労もまた多かったと思われる。「その道をぼくは裸足で通ったのだ。」と、群馬の歌会の折に、冗談のように先生が言われたことがあったが、私の知らない明治の世の、私の村の道を通われた先生に、限りなき親近感を覚えるのである。」とある。
- 1905 明治38 ※1 小市年譜は明治36年。吉田年譜は明治38年に「二冊」、宮地・吉村年譜は明治38年に、伊藤年譜には表記なし。文明存命中の『短歌』昭和60年11月号特集・土屋文明の年譜（吉村陸人編）は明治38年。
『群馬文学全集』2巻『ふゆくさ』「巻末雑記」p39に「此の中沢先生が夏の講習に東京へ出たさきからホトトギスを一冊送ってくれた。何の事なしにそれを読んだ。巻頭には蕪村句集輪講が載せられて、子規の名もまだ列ねられてあった。「村百戸菊なき門も見えぬかな」など二三句は今でも記憶している。しかし句よりは課題写生文の「長さ一町の間を写生せよ」「白銅五銭」などに一層引きつけられた。」（大正13年12月記）とある。
『群馬文学全集』2巻「写生から出て写生まで」p366に「「長さ一町の間を写生せよ」は「ホトトギス」の二月許り前の、募集写生文の課題であり、高崎の裏町の町並の動静を扱ったものが入選しており、私もそれを読んで、知っている実際の町並と、写生文を比較して、はは、写生文とはこんな風にかくものかなと、いくらか合点したところもあったからである。高崎の町並を写生したのは村上鬼城であったかも知れないが、私は鬼城に注意していたのではないので、忘れるというよりも、全く作者などには関心がなかったわけだ」とある。
『土屋文明私稿』p121に「中沢先生がホトトギスのバックナンバーを二冊送ってくれた。一、二年前の雑誌だがね、夜店かどこかで買ってくれたんじゃないかね。」とある。
『歌あり人あり』p140に「その中沢先生がどうしてなんだか、わたしが小学校にいるうちかな、中学に入ってからかな、「ホトトギス」のバックナンバーを送ってくれたね。」「東京で講習会を受けてきたという手紙と一緒に」「明治三十五、六年のものでしょうか。」「浅井黙語の表紙でね、蕪村句集の輪講が載っていた。」とある。
「長さ一町の間を写生せよ」（鬼城ほか）の掲載は『ホトトギス』6巻6号（明治36年2月）、「蕪村句集輪講」も連載されている。
- 1906 明治39 ※1 『群馬文学全集』2巻『ふゆくさ』「巻末雑記」p40に「最初の号には寺田寅彦氏の短篇「嵐」があつたのを記憶している」とある。寺田寅彦「嵐」掲載は『ホトトギス』10巻1号（明治39年10月）。
- 1907 明治40 ※1 村上成之就任日は『群馬』10号による。
- 1907 明治40 ※2 吉田年譜では「高崎中学校遠足榛名山に行く」とあるが、夏期休暇中であり、『群馬』誌上に掲載された学校行事に休暇中の遠足の記載はない。
- 1907 明治40 ※3 伊藤年譜「俳諧大要・獺祭書屋俳句帖抄等」、吉村年譜「『獺祭書屋俳句帖抄』『俳諧大要』『俳人蕪村』等」、吉田年譜「獺祭書屋俳句抄」「俳諧大要」「獺祭書屋俳話」「俳人蕪村」、国立国会図書館「獺祭書屋俳句帖抄」
- 1908 明治41 ※1 行き先についての記述なし。
- 1908 明治41 ※2 吉田年譜では11月22日。
- 1909 明治42 ※1 『群馬』13号に連名による筆記録掲載の責任者として記載あり。
- 1909 明治42 ※2 『短歌』32巻11号特集・土屋文明の吉村年譜では「数日後、青山の茂吉の病院へ行き医局員の早稲田大学専門部の替玉受験を頼まれる。」とある。論考の吉田年譜では9月25日「斎藤茂吉をはじめて訪問する。」とある。

土屋文明年譜（明治期・大正期）脚注

- 1909 明治42 ※3 『土屋文明私注』土屋家系譜に「紋三郎は藤十郎の弟、随筆「も一人の伯父」の紋番匠」とある。
- 1909 明治42 ※4 『歌人土屋文明』p50に「寺田憲は佐佐木信綱の歌誌「心の花」の一員であったが、また「阿羅々木」の有力な援助者でもあり、子規門下の双壁として左千夫と並んで「阿羅々木」の重鎮たる長塚節の少年時代からの親友だった。」とある。
- 1909 明治42 ※5 『歌人土屋文明』p52-53に「寺田憲からの補助は五円、一高の寮費は六円。（略）その年の十月下旬には自炊すべく寮を出て、学校に近い小さな家の建てこんだ地域、本郷区根津宮永町（現、文京区根津二丁目）の池田という家の二階の間借りした。大学生の下宿料が安くて十円前後の当時、一高寮費六円はかなり安い。それよりも更に安く考えたのである。」とある。
- 1909 明治42 ※6 吉田年譜には「斎藤茂吉をはじめて訪問する。」とある。
- 1909 明治42 ※7 杉敦夫年譜とは『西三河アララギ』に連載された杉敦夫の「土屋文明年譜ノート」。
- 1910 明治43 ※1 （杉敦夫による）『土屋文明論考』吉田年譜。／『歌人土屋文明』p54に「福迫が懇意の小此木信六博士に紹介してくれ、文明は内職にありつく事ができた。それは医学関係の文献の引き写しの仕事であるが、この小此木という人は心得のある人で、実はその文献引き写しは大した仕事でもないのだが、無償で金を与えては青年の心の負担になるだろうとの心づかいで、殊更に仕事させ、その報酬として援助したというのである。」とある。
- 1912 明治45 ※1 塚越家墓碑にはワカについて「塚越庫一郎四女」のほか「上郊小教員」とある。墓碑には明治41年6月28日没の正夫の名もある。
大井恵夫著『土屋文明 短歌の周辺』p45「稚子の死」がある。『アララギ』明治45年3月号に「小鳥と私（6首）」「別れし人に（4首）」、大正2年2月号「赤き椿（ほか12首）」が掲載された「稚子」がワカと同一人物であるとされている。「赤き椿」は「故稚子」と表記され、文明の挽歌らしき4首が続くが4首は歌集に収録されていない。
- 1913 大正2 ※1 7月13日付赤木格堂宛書簡「拝啓七日に飯京いたし候」
- 1913 大正2 ※2 7月13日付赤木格堂宛書簡「久米君一昨日来訪」
- 1913 大正2 ※3 7月14日付赤木格堂宛書簡「御名刺今日いただき候」
- 1913 大正2 ※4 7月16日付赤木格堂宛書簡「昨日津田氏と茅原氏とに参り候」
- 1913 大正2 ※5 『書簡集』p31蕨礎山宛書簡「成東中学あたりを借り受けて公開講演といたしたく候」「八月月上旬最好都合に候へど」
- 1913 大正2 ※6 8月3日付赤木格堂宛書簡「廿六日に挽歌のことにつき尋ねに参り（略）夜の九時頃に家を出かけ茅場町へ参り木戸をあけ茶室に入り候ひしに」
- 1913 大正2 ※7 7月29日付赤木格堂宛書簡「講演会（略）仰せに従ひ九月十月頃まで延期のやう今より折りかへし申上べく候」、『書簡集』p32蕨礎山宛書簡に「講演会（略）九月十月の交まで御延期下されていかが」とある。
- 1913 大正2 ※8 8月3日付赤木格堂宛書簡「三十日の午後十一時御逝去の電報を受取りてより何が何やら夢中」「今日午後は茶室文庫などの整理に参る筈にて」
- 1913 大正2 ※9 8月3日付赤木格堂宛書簡「昨夜四日ぶりにて帰宅」「葬儀は昨日午後三時出棺にて不行届ながら事を終へ申し候」

- 1913 大正2 ※10 8月4日付赤木格堂宛書簡「昨日午後再び遺品整理のため茅場町の左千夫の茶室へ」
- 1913 大正2 ※11 8月4日付赤木格堂宛書簡「二七日（八月十三日まで）私が茶室に起居して及ばざりし生前の報恩の万一つくすつもり」「今夜は今より湯に入りてすぐ本所へ行くつもりに候」
- 1913 大正2 ※12 8月11日付赤木格堂宛書簡「特別号御中止の計画のよし若し私が社を外にしての近日の行動よりして覚束なしとの御事に候へば御申のことも是非なくば存じ候へどもあれまでに御引き受けいたせしものに候へばそれを捨て、までもとは今が今まで思ひ居り申さずに候」
- 1913 大正2 ※13 8月13日朝付赤木格堂宛書簡。（高崎の村上成之方より投函）「昨夜遅く来高」
- 1913 大正2 ※14 8月13日朝付赤木格堂宛書簡。（高崎の村上成之方より投函）「今朝は母を省し、夕は赤城に」
- 1913 大正2 ※15 『書簡集』p34胡桃沢勘内宛「只今故郷の旅より帰り」
- 1913 大正2 ※16 『アララギ』6巻11号「私は二七日の後先生の位牌に別れて故郷に二日を過した。一日は山峡の小さな町で日が暮れて、そこに小さな停車場で終列車を待った」
- 1913 大正2 ※17 8月18日午前消印白石実三宛葉書「田山先生の御原稿いろいろと御配慮下有りがたく存じ候廿一日の夜或は廿二日の朝御本宅のへ参邸の上頂戴いたしたしと存じ居り候或は代理を差しつかはず」
- 1913 大正2 ※18 『書簡集』p35、8月30日付寺田憲宛書簡「昨夜高崎にかへり申し候」
- 1913 大正2 ※19 『書簡集』p36、8月30日付蕨真一郎宛「明日出発赤城地方に数日過ごしたく」、『アララギ』6巻9号「赤城より」として9月1日付から9月21日付の書簡文が掲載、9月16日の左千夫の四十九日法要は参列できず「宿の女中に頼みお萩」「香炉を借り香も燻じ」「野菊を湖に流し」たことが書かれている。
- 1913 大正2 ※20 『書簡集』p38、10月4日蕨真一郎宛て「村上先生の御書簡には小生と格堂先生との間に何等か感情の行き違ひなどあるやに言ひ及ばれしかとも候へど（中略）毎夜毎更くるまで青年日本経営につきて語り合ひ居り候」
- 1913 大正2 ※21 江東区亀戸普門院に伊藤左千夫の墓がある。
- 1913 大正2 ※22 『青年日本』1巻11号「信濃路の秋（二）」より「布半の二階座敷には朝日が快よく流れ込む。島木氏の寝て居る布団の上一ぱいに朝日が落ちて居る。（略）上諏訪で島木氏に別れて、私は再び不安の旅をつづけた。」吉村年譜には「10月島木赤彦を諏訪に訪問。諏訪高等女学校へ同行。」とある。
- 1914 大正3 ※1 『歌人土屋文明』p64に「赤木格堂の青年日本社の次には、小石川区安藤坂下の諏訪町（現文京区後楽二丁目）、坂上の大門町（現文京区春日二丁目）と下宿を転々して苦学生生活を続け、大正五年七月に大学を卒業したが職を得られない。」とある。
- 1914 大正3 ※2 『群馬文学全集』第2巻「文明短歌の秘密をさぐる」p503に「（山本）おれが貧乏していたもんだから半田良平君がやらないかといって、仕事を持ってきてくれたんだ。（土屋）ぼくは君からもらったんだ。（山本）そうだ。おれは「日の出前」を書いたら当って、また頼むと言われたんで、それで土屋にもやらしてくれないかって頼んだんだ。」とある。／『歌人土屋文明』p61に「これは森田草平に称賛された。」とある。
- 1915 大正4 ※1 『歌人土屋文明』p67に「文明が釈迦空と「アララギ」の選者になったのは大正六年三月号からであるが、その頃空は小石川区金富町（現文京区春日二丁目）の高梨方に下宿しており、それは文明の下宿の大門町の隣町であり、偶然にも双方の下宿の主は姉妹であった。」とある。

- 1916 大正5 ※1 『歌人土屋文明』p65に「文明は五年夏頃までには小石川区の伝通院の近く、諏訪町から大門町の藤生方に移り、親戚でもある友人福島竹治郎と同居下宿していた」とある。
- 1916 大正5 ※2 小市年譜「6月」、伊藤年譜「6月」、吉村年譜「7月」、吉田年譜「7月」
芥川年譜に「6月15日 卒業試験終了。7月10日 東京帝国大学文科大学英吉利文学科を卒業。」とある。
館蔵の文明履歴書に「大正五年七月十日 東京帝国大學文科大学哲學科卒業」とある。
当館所蔵の履歴書は昭和23年秋旧制山口大学に提出のもの。学制改革で新制大学になるについて当時の校長長崎太郎が東京帝国大学時代の友人であったところから教授として招請された。これは長崎太郎が校長を辞職したため実現しなかった。山口大学事務職にあったアララギ会員が昭和28年以来預かり、文明の長女小市草子氏を経由して当館に寄贈されたもの。
- 1916 大正5 ※3 『歌人土屋文明』p64に「国民新聞社の採用試験を、社に關係深い平福百穂の斡旋によりうけたがうまくいかず」とある。
- 1917 大正6 ※1 『歌人土屋文明』p68に「出版社光風館書店の責任者の四海多実三（民蔵）の紹介による。」とある。
- 1917 大正6 ※2 10月8日消印の葉書は「18」の読み落としではないかと推測される。
- 1917 大正6 ※3 吉田年譜、吉村年譜ともに10月に大井町1070に移転とあるが、書簡集p54に11月22日付で大井町□林町86から出された書簡がある。
- 1918 大正7 ※1 戸籍の写しには「塚越テル子と婚姻届出大正七年七月拾日受附」とある。
- 1918 大正7 ※2 『歌人土屋文明』p69に「二代目校長の三村安治は長野師範学校（現信州大学）での赤彦の先輩であり、赤彦とは心許した仲であった」とある。館蔵の文明履歴書には「大正七年三月二十五日 長野縣諏訪高等女学校教諭」とある。
- 1918 大正7 ※3 『群馬文学全集』「信濃の六年」p345に「森川汀川は、隣の小学校の勤務であったが、土地の出身者であり、長い教職にあったので、町の事情にも通じ、ようやく新築の借家を見つけてくれたが、それは、九月までという期限つきのものであった。」とある。
- 1918 大正7 ※4 『群馬文学全集』「信濃の六年」p346に「期限付きの家から、第二の借家に移ったのは、奇遇といえば奇遇であった。それは大阪屋という薬屋の別荘として建てたのであるが、更に新しい別荘が出来たので、借家としたという。広くはないが、自家用の温泉と浴室がある。家内が借用を頼みに出向いたところ、主人が、成吉の友人だそうですから前より家賃を引いて置きますということであった。藤森成吉君は、一高の寄宿舎で隣室であり、諏訪出身であるというので、私も諏訪に友人があるということから、いくらか話しあったこともあったのである。藤森君は帰省の際わざわざ訪問され、家のことで不自由があったら遠慮なくとまで言ってくれた。」とある。
- 1920 大正9 ※1 館蔵の文明履歴書には「大正九年一月三十一日 長野縣諏訪高等女学校長」とある。
- 1920 大正9 ※2 『アララギ』13巻12号に「土屋文明氏、大阪行の序中村憲吉氏を訪ね守屋喜七加納暁氏等と会遊し、更に奈良に正倉院を拝観し、神戸より船にて九州渡航、鹿児島迄行かれ猶長崎に廻りて斎藤茂吉氏を訪ねられ申候。」とある。
- 1920 大正9 ※3 吉田年譜・吉村年譜は18日となっているが、『アララギ』14巻1号に「十一月十七日、長崎滞在中の土屋文明氏歓迎歌会を斎藤茂吉氏宅に開く。」とある。参加者18人。
- 1921 大正10 ※1 諏訪湖博物館・赤彦記念館所蔵写真の裏書き。吉田年譜では「法光寺。憲吉、赤彦、百穂、茂吉と 70名」

土屋文明年譜（明治期・大正期）脚注

- 1922 大正11 ※1 『長野県松本蟻ヶ崎高等学校百年史』年表p.627 吉田・吉村年譜では3月14日。館蔵の文明履歴書には「大正十一年三月十四日 長野縣松本高等女学校長」とある。
- 1924 大正13 ※1 館蔵の文明履歴書には「大正十三年三月三十一日 長野縣木曾中學校長」とある。
- 1924 大正13 ※2 『長野県松本蟻ヶ崎高等学校百年史』年表p.627「4月8日、生徒への告別式をした後松本を離れる。」
- 1924 大正13 ※3 『歌人土屋文明』p.79-80に「四月九日、文明は妻テル子と二児を先行させ、自分は十日朝の列車で松本を去った。」「一家四人は郷里上郊村保渡田、テル子の実家の塚越家に身を寄せた。文明の実家はすでに保渡田に無い。」「二人の子をテル子の母にあずけた土屋夫妻は職を求めて上京する。母校の女子英学塾へ行ったテル子は偶然にも、かつて勤めた足利高女からの求人に接し、四月二十四日、足利に赴任する。」「幼児二人を抱えて高女に教鞭をとるテル子の足利の借家には、その勤務時間中に幼児を世話すべく、文明の妹の八千代が同居した。」
- 1924 大正13 ※4 館蔵の文明履歴書には「同年四月三十日 依願退職」とある。
- 1924 大正13 ※5 館蔵の文明履歴書には「大正十三年五月一日 法政大學餘科教授」とある。
- 1924 大正13 ※6 『土屋文明私稿』福島家系譜に「8月9日」とあるが、同書の執筆資料に「8月31日」を「9月1日」に訂正している箇所が複数あり、その過程で月に「8」が残り日に「9」が入ったために起きた誤植か。同資料中にある戸籍書写には「大正拾参年八月参拾壹日午后拾壹時本籍ニ於テ死亡同居者福島ノブ届出同年九月一日受付」とある。
- 1925 大正14 ※1 『アララギ』18巻6号（大正14年6月）に告知「7月29日～8月2日」、『アララギ』18巻9号（大正14年9月）編集便（赤彦）「安居会衆百二人は七月二十八日日没までに比叡山山上宿院に到着し、その夜一同講堂に集まつて会期中の講義その他の打合せをした（略）二十八日小生は尻押し人夫を頼んで山上に登り岡齋藤二氏は輿籠で上り中村土屋氏は徒歩で登った。」「翌三日早朝□皆下山解散並に予定会期を了り（略）岡氏は安居会後高野山和歌浦大阪を巡り中村氏へ一泊し帰京、齋藤土屋内藤三氏は和歌浦にて岡氏と別れ、那智の方へ廻った。」
- 1926 大正15 ※1 『アララギ』19巻6号（大正15年6月）に告知「8月2日～8月6日」、『アララギ』19巻9号（大正15年9月）「第三回安居会の記」（鹿兒島寿蔵）「八月一日 土屋文明先生辻村直氏其他諸氏前日到着して一切の用意をされ登山の会員を受付けらる。」「八月七日 午前四時起床。（略）朝食を終へ、おのもおのも別れを惜しみて下山す。」

（文責：吉田佳代子）